

ブラック・サッシュの自己認識と外部からの認識

— 認識と社会の関係 — (2)*

上 窪 一 世

Self – perception of the Black Sash and perception from others :

the relation between perception and society (2)

KAMIKUBO Kazuyo

80年代— : 「女性、人間」としての連帯、葛藤

80年代は83年の政府による人種別三院制議会の導入やそれまでの首相制から大統領制への移行など様々な改革が進められ、アパルトヘイトへの国内外の批判の高まりを巧みにかわしつつ強化しようとした。一方、反アパルトヘイト運動側も連帯していく動きをみせた時代でもある。その象徴が83年の「統一民主戦線 (UDF)」結成であったが、ブラック・サッシュにとってもそれまで活動対象や協力関係と言う意味においてやや内向きな活動であったのが、外部組織とのネットワークが進む、また、求められるという大きな転換を迎える時期でもあった。さらに会員の属性の変化、組織の制度改革もあり、その意味でも転換点であった。

具体的には結成当初からボランティアな精神によって支えられてきた活動だが、1980年

* 前稿及び本稿を通して考察するのは、1955年結成当時から80年代までを対象に主として「英語系白人女性」からなる反アパルトヘイト組織、ブラック・サッシュの自己認識とブラック・サッシュへの外部からの認識の変遷である。

ここでの「自己認識」には2つの要素が含まれ、ひとつは活動において表出し、意識される自分達の属性をどのように認識しているかということ、もうひとつは自分達の活動自体をどのように認識しているかということである。前者には「白人」、「女性」、「中産階級」といった人種、ジェンダー、階級などの要素があげられる。後者の活動とは具体的には活動内容、方向性といったことが相当する。

これらの認識は時代や社会状況との関連によっても形成、表出されるものであり、常に外との相互関係で構築される開かれた関係である。この相互作用を(1)では70年代まで考察した(『工学院大学 共通課程研究論叢』第48-2号、2011年2月、21-34ページ)。本稿はその続編である。

代に入り対応する問題が膨らみ、また、法律が絡むことでそれなりの知識も要求される事態となっていたことから初めて給料付で活動を行う専任制を導入することにした。

また、1985年6月には「アドヴァイス・オフィス トラスト (The Advice Office Trust)」を設立した。これは以下に述べる背景³⁶があって、業務の拡大に伴う経費増大に対応するためトラスト化することで免税されるという措置を利用したものだ。

アドヴァイス・オフィスはそれまで通訳や秘書業務などの必要最小限の給金が必要となる業務以外は、ボランティアによる人々によって運営されてきた。しかし、年々業務が増えるにつれて、給金付のケースワーカーを補充する必要が出てきていた。ただし、これらの実情はリージョンの会員の数によってもかなり異なっており、ジョハネスバーグのアドヴァイス・オフィスの場合では最大案件数を抱えているが、会員の数も最大であるため、ボランティアの数が十分に確保され、フルタイム勤務のケースワーカーをひとりと週に3日午前中だけの勤務のケースワーカーをひとり雇えば十分という状況であった。対照的にポートエリザベス地区の場合は、小さなリージョンであるため最大で40名の会員のうち大半が仕事をしている女性達であった。2人のフルタイムのケースワーカーに、フィールドワーカーをひとり雇っているという状況だった。ピーターマリッツバーグもリージョンとしては小さく、ボランティアは全て幼い子供を持つ女性達であったためお昼時にはオフィスを出なければならぬという状況だった。それ故全てのクライアントに対応することができず、午後1時以降の午後の業務を引き継いでもらうためにパートタイムのケースワーカーを雇ってきたという経緯があった。

また、通常のこうしたアドヴァイス・オフィス業務に加えて危機的状況に伴う業務の必要性も非常に高まってきていた。具体的には様々な形態の暴力、拘留による被害者を他の組織に引き合わせる事が、ジョハネスバーグのオフィスでは可能だが、比較的小規模のオフィスでは他の組織自体が存在しない。

業務の拡大を数値的にも裏付けるデータがある。1985年にジョハネスバーグのアドヴァイス・オフィスで行われた被害者であるクライアントのインタビュー数は、14208件だったが、1986年にはさらに増え、16181件にのぼった³⁷。同時期の他のリージョンでも取り扱う案件数がいずれも増えている³⁸。しかも、1987年1月にはイースト・ロンドンとナイズナにアドヴァイス・オフィスが開所し、3月にはソウェトにオフィスが開所予定と、これもまた需要の拡大を裏付けている。

³⁶ 経緯については次を参照。The Black Sash, The Advice Office Trust, Report on the Activities of the Trust from June 1985 to December 1986. UCT MA BC1065. トラスト委員のひとりであるシーナ・ダンカンが1987年2月19日に作成した親書 (confidential)。

³⁷ Ibid.

³⁸ 月数やオフィスの規模などの違いはあるが、次のような数字である。ダーバン、2923件 (10ヶ月)；ケープタウン、3115件；ピーターマリッツバーグ、2360件；ポート・エリザベス、5156件 (11ヶ月)；グラムズタウン、807件 (半年)。Ibid.

全ての案件は、ボランティアが給金付きのスタッフと共に業務を続けていたが、ブラック・サッシュとしてはボランティアに支えてもらうという方針を維持し、どうしても必要な場合にのみ人を雇うというのは、最も重要であると考えていた。と同時に業務拡大の必要性は経費の増大とすぐに結びつく側面を持ってしまう。こうした状況において多くの企業や施設がブラック・サッシュを財政的に支援したいと申し出てくれ、そのなかのひとつがアメリカのフォード財団であった。

しかし、ブラック・サッシュは「寄付認可組織 (Fund Raising Organization)」として行政に登録していないため、自会員や長年、関係を維持してきたドナルドソン・トラスト (The Donaldson Trust)、チェアマンズ・ファンド (the Chairman's Fund) といったトラストを除いては個人的な献金、寄付を受けることが出来なかった。寄付以外の形態で受け取れる金銭は、相手方と契約を結び、契約相手のために何らかの業務を行う、例えば情報提供や定期的な報告書の提出に対する対価という形のみであった。しかし、こうした報酬は、収入とみなされ、所得税を支払わねばならないという事態が生じることになる。

こうした事態に対して弁護士や監査、財政アドバイザーといった専門家の意見を仰ぎ、アドヴァイス・オフィストラストを設立することとなった。トラスト化すれば所得、寄付、遺贈 (Bequests) の税金を免除されたためである。

以上のような経緯を経て、トラスト化した結果、アドヴァイス・オフィス宛に授与されるあらゆる金銭を受け取れるようになり、業務も円滑になった。

このように80年代は活動に大きな変化が見られた。そうしたなかでの彼女達の自己認識と他者からの認識、評価はどのようなものだったのか。以下でそれを見てみる。

〈自己認識〉

この時期の自己認識の特徴として言えるのは、国内でのネットワーキングが展開していくだけでなく、海外とのネットワークも進展し、活動が外との接触によって拡大していったことが影響している点である。アパルトヘイトの実態を知る数少ない団体として情報提供を武器にその国際的な認知度が増していき、また、この時期、国際的に女性をめぐるあるいは女性を語る言説の変化、つまり、ジェンダー研究のような女性に注目した視点が出てきたことなどとも連動していよう³⁹。以下でこうしたことを念頭に様々な出来事を辿ってみる。

³⁹ 南アフリカでも南アフリカの歴史を「女性」もその行為者として組み込んで見直すという傾向は、80年代に隆盛してきたと言ってよい。1983年10月号の*Journal of Southern African Studies*では、“Special Issues on Women in Southern Africa”と題して特集記事が組まれたことにもみてとれる。また、南アにおける反アパルトヘイト運動において「女性」を主体的にみる視点の重要性を指摘した先駆的研究としてCherry Walker (1982) *Women and Resistance in South Africa*, Cape Town, Johannesburg: David Philip, が出るなど「女性」をめぐる視点と語りに変化があった。

1983年2月27日付のアメリカ、ニューヨークタイムズ紙でのブラック・サッシュの紹介記事で当時代表であったダンカンが自らの組織、活動を語るなかで、「我々の主な働きは政治的なプレッシャーをかけることであり、それはブラック・コミュニティの人々を教育することを通じて実行するものです。我々が日々の接触のなかで得られる知識なしにはそれは成しえないでしょう」と語り、自らの活動の政治性をも自覚した内容となっている。その中で「日々の接触」という「顔の見える関係」の重要性も認識し、ここにも50年代後半から始まったアドヴァイス・オフィス活動の成果が表れている。また、1985年7月28、29日のアメリカワシントンポスト紙にもブラック・サッシュの記事が掲載されたが、そのなかで代表であったダンカンは盗聴などの嫌がらせを受けながらも「我々は守られています。というのも我々が白人であり、女性だからです」と述べ、自らの立場をどのように認識しているか、その一端をのぞかせている。

1987年にもダンカンはアメリカ訪問を行っているが、この訪問自体は「アメリカヘブライ教会連合 (Union of American Hebrew Congregations)」の招待によるものだった⁴⁰。同連合からの招待状によると当時、ニューヨーク市長であったエドワード・コック (Edward Koch) がメディア関連のある会議で、南アフリカ関連のニュースは統制されているが、アパルトヘイトの問題は南アフリカから勇気と経験を持ち合わせた訪問者を起用することで新聞の一面になりうるということを描き、それにふさわしい人物としてシーナ・ダンカンが選ばれたという。

招待状によるとブラック・サッシュについて「尊敬すべき白人女性達の人権団体」であり、「世界中を通じてその長きにわたる人種的な公平 (racial justice) と人権への関わり」が今回の招待の理由であると述べている⁴¹。また、このツアー中にインタビューを受けた記事がアメリカのいくつかの新聞、雑誌に掲載されたが、そこでどのようにダンカン、及びブラック・サッシュが言及されているかを見してみる。

エール大学でのインタビューは「Fairfield County Advocate」に掲載されたが、「ブラック・サッシュの会員、2500名の白人女性の人権団体の」という説明があり、ジョハネスバーグ事務所がガス爆弾によって爆破されるという事件との関連で、それが「弾圧 (repression)」と呼ばれうるものではないだろうと言及した後で、ダンカン自身の言葉として「我々はほぼ白人、中年、中産階級 (white, middle aged, middle class) なので。それはハラスメントで、弾圧というには取るに足らないものです」と述べられている⁴²。また、メンバーシップに触れている箇所

⁴⁰ 1987年11月にシカゴ、ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントン、ニューヘブンを周る人権ツアー。ツアー中は800以上もの改革シナゴグ代表者が集う3000人規模のシカゴでの総会で、ダンカンに会の最高名誉賞である「モーリスM.アイゼンドラス光明者賞 (the Maurice M. Eisendrath Bearer of Light Award)」が授与されること、また、各都市での教会、大学キャンパスをはじめとする様々な場所においてダンカンが宗教や人種を超えた集まりで演説を行うことが予定された。

⁴¹ Wits AE862 E5 : Sheena Duncan (Personal Files)

⁴² Wits AE862 E5 : Sheena Duncan (Personal Files) ; *Fairfield County Advocate*, November 16, 1987.

では全ての女性に開かれているが、圧倒的に白人であること、60年代後半、70年代初めの「黒人意識運動」の興隆の説明があった後でダンカン自身の言葉として「黒人の人々が白人リベラルの組織に慌てて参加はしませんでした、それは良かったのです。というのも白人コミュニティに向かって呼びかける必要があるからです。我々は白人としてよりうまく働きかけることができるでしょう」とあるなど、「白人」であることの認識と、それ故「白人」コミュニティへの働きかけを行うという意識があったことが窺える。実際、記事でも触れられている「徴兵拒否キャンペーン、(End Conscription Campaign, ECC)」⁴³の取り組みなど白人コミュニティを意識した活動も行っている。

また70年代半ばには失敗に終わった「女性」としての取り組みは、80年代半ば以降の反アパルトヘイト運動全体がネットワークしていこうという潮流にあって新たな展開を迎えた。その象徴的出来事が1987年の「南アフリカ女性連合 (FEDSAW)」再建に伴う「連携問題 (affiliation issue)」だった⁴⁴。FEDSAWは1954年に結成されたが、1960年代の政府による弾圧期に主要な幹部が逮捕されて以来、事実上の活動休止状態であった。この再建に際してブラック・サッシュは連繫を求められたのである。

FEDSAWは54年の結成当時にもブラック・サッシュに連繫の打診を行った。しかし、当時、FEDSAWは共産主義志向のある政治組織との関係もあり、共産主義との政治色をつけられるのではないかという虞もあってブラック・サッシュは断った経緯があった。ブラック・サッシュは、この87年の再建時にも内部による議論を経て、連繫ではなく、「observer status」——議論や活動には自由に参加するが、より「公的」な形で拘束を受けない——という道を選択した。そのためブラック・サッシュの組織全体としての取り組みはないものの、ウエスタン・ケープ地区では、カリン・チャップ (Karin Chubb) をパイプ役としてFEDSAWとのプロジェクトに参加するという形態を取った。

こうした対応は結成当初時の断りの理由であった共産主義への虞とは違い、「女性」として連帯し、反アパルトヘイト運動に関わる重要性を認識しつつも、そのなかでアフリカ人女性らと立場の違う自分達をどのように位置付けるのかに苦慮した結果である。つまり、「女性」というくくりが階級や人種によって分断されているという現実を認識しながらも、彼女達にとってこのように「女性」というくくりが、反アパルトヘイト運動を自らの問題として意識する足がかりとなっていた側面もあるのである。

このようにこの時期は自らの属性のうち「白人」、「女性」について再考を促され、自己認識への新たな変化が見られたのである。

⁴³ 南アフリカの青年には兵役の義務があるが、「良心的拒否」を行うことを支援するキャンペーン。ブラック・サッシュが発起人のひとつとなって始まった。

⁴⁴ 詳細は拙稿「80年代反アパルトヘイト運動におけるミッシングリンク：『女性』というくくりがもたらしたもの——『ブラック・サッシュ』の経験から——」、2002年3月発行、『アジア・アフリカ研究』41巻3号(アジア・アフリカ研究所発行)44-61ページ。

〈他者認識〉：マスコミ

次に外部、なかでもマスコミがどのように彼女達を認識していたかをケープタウン大学の学部生であったサザーランドが卒論作成のために行ったインタビューをもとに検討してみたい⁴⁵。

サザーランドはブラック・サッシュの評価を探るため主に主要な雑誌や新聞の編集者などにインタビューを行った。対象としたのはケープタウンで最大紙である *Cape Times*, *The Argus*, *Die Burger* の3紙の記者や編集者、さらに南アフリカで当時最も読まれていた女性誌である *Fair Lady* の編集者及び次期編集者である⁴⁶。

Cape Times の政治記者であるトニー・ハード (Tony Heard) によれば、同紙の読者層は当時、白人と非白人がおおよそ半分である。白人読者はかなりの割合で「進歩連邦党 (PFP)」支持者あるいは黨員であるだろうと推測している。ブラック・サッシュの評価については、存在はよく知っているだろうが、評価自体にはかなりバラつきがあるだろうと述べている。

また、ハードの言葉を引用すればPFP支持者ではないイギリス帝国の没落と共に南アフリカへ下ってきた保守的な男性は、ブラック・サッシュを「本来は台所にいるべきはずの厄介者で半ば危険分子のご婦人達」だと見なしているだろうと指摘している⁴⁷。

非白人読者については平均的にみて、ブラック・サッシュについては非常によく知っている中産階級でカラードの人達だろうと推察している。さらに彼らは極左であって、ブラック・サッシュを「良き人々 (do-gooders)」として受け入れるのを拒絶するだろうとも述べている。つまり、「上品ぶったご婦人方がアドバイス・オフィスだろうが何だろうが活動することで自分達の良心を救おうとすべきではない」と思うだろうというのである⁴⁸。

以上のことを踏まえた上でもし、彼女達は善きことを行っているかどうかと問われれば、読者の大多数は肯定するだろうとハード自身は述べている。さらに読者層による見方の推測ではなく、ハード個人の意見は、ブラック・サッシュに対してあらゆる不測の事態に直面しながらも活動を続けていることに敬服していると述べている。

次に *The Argus* 紙のヒュー・ロバートソン (Hugh Robertson) 記者とのインタビューである⁴⁹。氏は、自身の身内にブラック・サッシュの会員がいることを明かした上で1) 白人のなかでもリベラルと呼ばれる人々、2) リベラルではない人々、3) アフリカーナーの女性達という3つの視点から次のように述べている。

⁴⁵ Sutherland [1987 : 64-73]

⁴⁶ サザーランド自身は女性誌の編集者を対象にいたのは購読者がブラック・サッシュのメンバーの出身層とも重なるであろう「白人」、「中産階級」、「主として英語系の女性」の女性達に焦点をあてて考察したかったためと述べている。Sutherland [1987 : 64]

⁴⁷ Sutherland [1987 : 66]

⁴⁸ Ibid.

⁴⁹ Sutherland [1987 : 65]

当時であっては弱小化していた1) のリベラル派の白人にとって彼女達は「ほとんど英雄的」だと主張する。というのも非常に実践的で道義的な組織であることが理由だという。実践的というのは、単に事態に関心を向けるというよりも実際に何かを行っているという意味においてであり、道義的というのは、危険を冒し、また、時間やエネルギー、金銭的な面などでの多大な自己犠牲を払っているという意味においてであるという。

こうしたいわば好意的受けとめ方とは逆に2) のグループ、なかでも都会化されたアフリカーナーは、当時、着実に彼女達への敵意を募らせているだろうと論じている。というのも、様々な問題群に対して彼女達がとる立場が彼らの見解、偏見、態度を脅かすものだからだという。彼らは最悪彼女達を厄介者と見るかせいぜいよくて彼らが進んで認めようとはしない特性を持っているくらいにしか捉えていないだろうと述べている。さらにロバートソンはこうしたアフリカーナー達の多くがブラック・サッシュに対して卑屈な・屈折した賞賛を抱いているだろうとも指摘している。とりわけアフリカーナーの女性達は、英語系白人の女性達が行っているような政治的な問題への取り組みの機会を一般的には持ち得ずにいるためにそうした賞賛の仕方をしているだろうという。

ロバートソンの憶測と推察に基く発言であって、実際に、「アフリカーナー女性」という総称でくくられてしまう人々がどのように感じていたのか根拠は示されていない。しかし、少なくともアフリカーナー女性をその様に捉えてしまうような認識が当時、存在したことに注目したい。こうした認識から「白人」カテゴリー内に「女性」というカテゴリーがそれを媒介にして分断と屈折した連帯という両義的な状況をもたらしうる要素として作用していたことが窺える⁵⁰。

さらにアフリカーナーの認識と態度ということで見てみる。*Die Burger* 紙の主席副編集長ドミッセ (Dommissie) 氏によれば、同紙の読者層は3分の1はカラードだと見積もった上で白人でアフリカーンス語話者が大半を占めているという。居住地別で見ると3分の1がタイガーバーグ (Tygerburg) 3分の1がステレンボッシュ (Stellenbosch) とその周辺地区、残りの3分の1がケープ州南部の田舎であるという。ケープタウン南部の郊外⁵¹に居住する講読者は余りないだろうと推測している。さらにドミッセは上述した地域の居住者が非常に影響力をもっているという。またインタビューを行ったサザーランドによればブラック・サッシュに対してこれらの購読者の大半が、非共感的であろうと氏は率直に述べたという。

より細かくには、アドヴァイスオフィスの活動やその他の救済活動に対しては好意的な見方をしているだろうが、政治的な活動に対しては否定的な見方をしているだろうと述べている。この政治的活動というのは救済を超えた活動全てを指しているという。このような否定

⁵⁰ このような「女性」というくくりによる新たな関係構築を図る動きについては上掲前掲論文。

⁵¹ ケープタウン南部の郊外という言葉が指し示すのは、ケープリベラルと呼ばれるリベラルな思想が影響力をもっている地域という意図を込めた発言であるとみてよい。

的な見方は次の2つの要素によって増幅されてきたとドミッセは指摘している。ひとつは南アフリカ人ではない、より重要な点は南アフリカのパスポートを持たない人間が組織の幹部に就いて様々な政策決定過程に携わっているのは適切ではない、という見方だという。ドミッセは、その例として当時送還されたばかりのアニカ・ファン・ジルスヴィック (Annica van Gylswick) を挙げたという。彼女はスウェーデン市民であり、首都プレトリアにあるブラック・サッシュの支部長であった。つまり、彼女のようないざとなれば外国籍のパスポートという「安全圏」に逃げ込める会員が他にもいると指摘しながら恒久的に南アフリカに住む可能性のない人間が、自らの行動に責任を取れるのかという疑念が、否定的見方の要素となっていると述べている。

もうひとつの要素として挙げているのが、結成されて間もない「統一民主戦線 (UDF)」⁵²との関係である。ドミッセ自身がインタビュアーであるサザーランドに公的な結びつきの強い「連繋 (affiliation)」をブラック・サッシュはUDFとの間に結んでいない⁵³ことを知らされると驚いたことが記されている。その上でドミッセはこのような思い込みが購読者達にも広く行き渡っているであろうことを確信を持って述べたという。そして、少なくともブラック・サッシュは、UDFの考え方に連繋しているという見方はなくともUDFに共感的であるという見方をされているだろうとも指摘した。

このようにUDFとの連繋が否定的に捉えられてしまう背景をドミッセはUDFが南アフリカにおいて「過激なマルクス主義者の人民戦線が則っている」⁵⁴と見られている点をあげている。そして氏の個人的見解であると断った上で共産主義の脅威に対してブラック・サッシュは気づいておらず、むしろ気づかないうちに利用されているという見方を提示した。

最後に『フェア・レディー (Fair Lady)』の編集者とのインタビューから「女性」という立場での捉えられ方を探っている。この雑誌自体は当時、全国で18万部の部数があり、認知度の高い雑誌といってよい。読者層は圧倒的に白人の英語話者 (83%) で、年齢層も若く (35才以下が58%)、経済的にも恵まれており (最高レベルの収入がある人の全国平均が39%であるのに対してこの読者層は52%)、教育水準も比較的高く (高校卒業かそれ以上のレベルが全国平均28%に対して51%)、勤労者率も68% (全国平均は37%) と高い⁵⁵。

インタビューに応じたデイン・スマッツ (Dene Smuts) によれば読者層はこうした特性から想起されうるイメージとは違い、ブラック・サッシュに対してほとんど共感をよせたり理解を示すという態度は見られないだろうと述べている。そして彼女個人の見方としては

⁵² 1983年にそれまで散逸的な運動を行っていた各種反アパルトヘイト組織が結集し、UDFを結成した。カラードの牧師であるアラン・ブラサークを事務局長に据え、600とも言われる組織、団体が結集した。

⁵³ このUDFとの連繋問題については拙稿「80年代初頭における反アパルトヘイト運動の様態：UDF結成時の加盟問題を通して」『工学院大学 共通課程 研究論叢』第41-1号、2003年10月、125-137ページ、を参照のこと。

⁵⁴ Sutherland [1987:69]

⁵⁵ 数字はすべてSutherland [1987:71]に記載されていたもの。

60、70年代に一般的にみられがちであった「道徳的な抗議 (moral stand)」を超えた行動をとっているとしてブラック・サッシュを評価しているという。他の組織が行っていた過去の活動形態とはつまり、ある人間や組織が何が善悪なのかを「知っている」とし、崇高な道徳的根拠を持ち出すという方法で他の人を容易に疎外してしまったことを指すのに対し、ブラック・サッシュは現場に赴き自分達が信じ、発言するに足る情報を収集することで根拠を提示している点が他の組織などと異なっているという。これらの発言はアドヴァイス・オフィス活動を念頭においてのことと思われる。

一方、読者層についてさらに次のように述べている。南アフリカにおいては比較的進歩的といえる読者層であるが、彼女達は疎外感を感じているという。ブラック・サッシュは過激というイメージを抱いており、そのような認識のされ方をパーティーで一人でもそこにブラック・サッシュの会員がいると分かれば会話が止まってしまうという逸話を持ち出してスマッツは語っている。その他にインタビューのなかで一般的にもたれているイメージとしてスマッツはブラック・サッシュを「どこか過激な人たち」「よそ者」「変わり者の女性達」といった言葉で形容している。

以上の4紙・誌の関係者とのインタビューからブラック・サッシュの会員は80年代半ば当時、「平均的な」南アフリカの白人女性から逸脱したイメージを持たれていたといえる。そして、そのイメージの源にはUDFやそれと関連する共産主義への脅威といった当時の社会的風潮が反映されていたと指摘できよう。評価に関してはアドヴァイス・オフィス活動のような救済活動に関しては概ね肯定的な評価を得ており、逆にいえば彼女達の肯定的評価を保っているのはアドヴァイス・オフィス活動だったといえる。

：活動家達からの評価

南アでは70年代末の住民によるアドホックな自治活動を契機に、80年代に入るとさらに市民レベルでの反アパルトヘイト活動が活発になっていく。ここでは実際に政府への抗議活動を行っている「同胞」からはどのように見られていたのかを考察したい。まずは同じ「白人女性」という背景をもつヘレン・ジョセフ (Helen Joseph) へのサザーランドのインタビューから考えてみる⁵⁶。

⁵⁶ ジョセフは、1905年イギリスのサセックスに生まれ1992年に亡くなった。インドでの教師生活を経て1931年南アに移住。第二次世界大戦中に福祉情報官 (Welfare and Information officer) として南ア空軍に入隊した。1951年に衣料労働者連合 (Garment Workers' Union) の医療援助基金 (Medical Aid Fund) の事務局長となり、そこでの Solly Sachs との出会いがその後の政治活動への契機になった。その後、50年代の反アパルトヘイト運動を牽引した組織のひとつ「民主主義者会議 (Congress of Democrats)」に参加したり女性組織「南アフリカ女性連合 (Federation of South African Women : FESAW)」の名誉事務総長に選出されたりした。こうした活動の間には度重なる逮捕、監禁、投獄のめにもあっている。80年代には最大の反アパルトヘイト組織であるUDFの名誉後援者 (Honorary Patron) でもあった。

ヘレンはインタビューでブラック・サッシュについて次のように語っている：

[50年代からすると]大分、ブラック・サッシュはこの頃、多くのことが変わってきていると思います。彼女達はかなり[民主運動に]接近してきていると思います。ですが、彼女達はUDFについてまだ、幾分か神経質ですね。—略—ブラック・サッシュは全ての女性に門戸を今開いています、一方であなたがブラック・サッシュについて考えるとき彼女達が非人種主義組織だと思いませんか。多分に白人女性の組織のままであり続けてきたでしょう。—略—しかし、政治的には彼女達がどこに位置しているのかわかりません。私は彼女達も様々な立場に分かれていると思っています。ですが、まだ、彼女たちは全体的に中産階級の資本主義者だと思っています。そのことから彼女達は抜け出せていないのです⁵⁷。

UDFの結成により諸運動体が連繋を図ろうとするなかで、UDFとの連繋について最終的に連繋しないなど、ブラック・サッシュの行動が一步引いたものとして受けとめられていることが分かる。そして、「人種」と「階級」の壁を越えていないというジョセフの痛烈な批判が、ブラック・サッシュの立場を物語っている。ジョセフのインタビューからいえるのは評価基準として彼女達が白人の主に中産階級であるという認識を持たれ、それらの属性が評価にも批判にもなりえていたということであろう。前者（白人）からは既得権を持った集団、「にもかかわらず」アパルトヘイトの被害者を救済しているという見方になり、後者（中産階級）からは自分達の権利、特に経済的な権益を掘り崩さないまま救済し続けることが欺瞞であるという批判に連がる。こうした批判は常につきまとうものでもあった⁵⁸。

：政界からの認識

一方、こうした非政府組織のいわば政党政治外の組織、個人からの認識ではなく、政党などの政界にかかわる存在からはどのように認識されていたのだろうか。同じくサザーランドによるインタビューを通して考察したい。

ピーター・ソウル（Peter Soal）氏は野党「進歩連邦党（PFP）」の所属であり、インタビューを行った1987年2月当時の時点で党員歴20年、議員歴4年の国会議員であった。さらに、ブラック・サッシュの賛助会員（associate member）でもあった⁵⁹。インタビューの中でソウル氏はブラック・サッシュを次のように認識している。

（略）彼女達は制度によって抑圧されている人々を手助けすることに重点を移しました。何千何百もの人々を助けています。

⁵⁷ Sutherland [1987: 59-60]

⁵⁸ ブラック・サッシュ内部においてもアパルトヘイトが資本主義と結びついていることから経済的権益にまで踏み込むべきだという議論はあったが、その点については口ずぐみ状態になることを批判する声もあった。Jill Wentzel (1995), *Liberal Slideaway*, Johannesburg: South African Institute of Race Relations.

⁵⁹ サザーランド自身がなぜ、ソウル氏をインタビュー相手に選択したのか理由が示されていないが、賛助会員であったことで比較的接触が容易であったのではないかと推察される。尚、PFPという政党を選んだのはブラック・サッシュと類似した目的を持つ組織のひとつであるとの認識からだという。

彼女達のアドヴァイス・オフィス活動はパス⁶⁰や流入規制についての情報と手助けという観点から比類のないものとなっています。

勿論、パス法は現在では廃止されていますが、しかしながら南アフリカの黒人達は政府の役回りや、黒人達が搾取されるために不利益を被っています。彼らは白人が自分を守るために造り上げた全ての法律や規則、慣習に自らの解決策を見出すことは出来ません。ブラック・サッシュはその点において黒人の人々を支援する素晴らしい役割を果たしています⁶¹。

以上のインタビューから分かるのは、ブラック・サッシュに対する肯定的評価の源泉がアドヴァイス・オフィス活動によるところが大きいということである。他の政治組織などと比べて道徳的な価値観をふりかざし、正悪を述べるのではなくアドヴァイス・オフィス活動によって制度の被害者達を支援していた点は従来の組織には見られないものであった。彼女達の属性が批判の源にも成り得るのに対してアドバイス・オフィス活動のような「弱者救済」は批判的な側からも評価される活動であったことなどから、自らの基盤を築き、肯定的評価、認識に結びついていくものだった。

⁶⁰ パス法は1952年に改正された法律であり、正式には「パス廃止・書類統一法」という。もともと1913年の「原住民土地法」、さらに1936年の「原住民信託土地法」で国土の13パーセントに押し込められたアフリカ人は、生活のために白人居住地域に出稼ぎに行かざるをえなかった。こうした出稼ぎ者の流入を管理、規制するためにアフリカ人にパスの携行を義務付ける内容となっていた。

パス法の起源は、ケープ植民地での奴隷制に遡る。このときのパスは、奴隷が外出する際に主人が与えた鑑札であり、通行許可証であった。オランダの植民地下にあった1709年以来ケープの奴隷はひとりで外出するにはこのパスを携行するのが慣行となっていた。これが鉱業の開始にともない、鉱山労働者を管理するための制度として再導入され、さらにアフリカ人の都市部への移動を制限する手段として全国規模で適用されていった。1948年に国民党政権が樹立するとそれまで各州ごとに制定されていたパス法が統一されることになったのである。表向きはそれまでのパスを廃止するというものであったが、その代わり「リファランス・ブック (reference book)」と呼ばれる新たな手帳の携行を義務付けていた。

国民党による統一以前には1920年に「原住民パス法委員会 (Committee on Native Pass Laws)」が出した勧告と1948年2月に提出された政府の諮問機関「フェイガン委員会」の報告書に見られるようなパス制度への見直しの流れもあった。この報告書では都市化の傾向は避けられず、パス法は緩和されるべきであり、出稼ぎによる流入は全国レベルでの労働局制度 (labour bureau) を通して最適な場所へ流れるようにすべきという勧告であった。しかし、52年のパス法はこれと逆行するものであった。この時点ではパス携行の義務はアフリカ人男性のみに適用され、アフリカ人女性へはまだ適用されていなかった。

以前は、アフリカ人女性達は、ある特定地域に限ってその地方行政の規制下でパスを携行することが求められていたが、52年の法律は、国会によって制定され、全国レベルでの携行義務を適用する内容であった。こうした適用は初めてであった。1955年9月、このアフリカ人女性への携行を義務としたリファランス・ブックがまもなく発行されると宣言された後、徐々に全国各地で導入されていった。政府は原住民問題担当省内の機動部隊を抗議の激しい都市部を避け、アフリカ人による政治組織の弱い農村部や小規模の田舎へと送りこんだ。そこではチーフを協力させ、女性達にパス (リファレンス・ブック) を携行するよう指示させた。拒んだ場合は、村からの追放や投獄といった処分が課されることもあった。

⁶¹ Sutherland [1987: 55-57]

：国際社会からの認知

設立当初にももの珍しさから海外に報道され国際的な認知を得たが、それは一過性のものに過ぎなかった。その後、地道な活動、特にアドヴァイス・オフィス活動を通じての実態の情報集積は組織にとって「情報」という武器を握ることになる。そうした実績は設立当初と同様に「白人の女性達」という珍しさはついてまわるものの海外にも知れ渡ることとなった。そうした国際的な認知、認識というものがどうだったのかを以下にみでみる。

さきの自己認識のところでも触れた1983年2月27日付のニューヨークタイムズ紙でのブラック・サッシュの紹介記事では、見出しで“A White Women’s Group Counters Apartheid”とあり、本文でも「white,middle-class women」や「the women monitor」という表現をしている。「白人」で「女性」であるという認識のされ方は、「アパルトヘイト＝黒人（＝アフリカ人）をはじめとする有色人種への差別」という認識の裏返しとして「白人」が意味を持ち、1975年の国際婦人年から10年余りがたつてこの時期国際的にもジェンダー研究が始められるなど、女性をとりまく言説に変化があったことで「女性」への注目が増していたことと関連しよう。つまり、そうした表現にある種の注目を集めるだけの意味付けがあったということである。

また、国際的なアパルトヘイト批判が高まるなか、80年代半ばからは「内政不干渉」から一歩踏み出し、国際社会も人権尊重の立場から南アフリカ批判を強めていった。そのなかで歴史的にも南アフリカと関係の深いイギリスを中心とする「英連邦（Commonwealth）」も南アフリカをことある毎に非難してきた⁶²。英連邦首脳会議決定が国連の対南ア武器禁輸措置へと結びついたり、スポーツ交流の制限を1977年のグレネーグルス協定で提唱するなどはその一例である。そうした動きのひとつとして1985年、バハマの首都ナッソーで開催された英連邦首脳会議で、南アフリカへより一層の圧力をかけるために「英連邦賢人調査団（The Commonwealth Group of Eminent Persons）」⁶³を結成することが決定された。調査団の目的は南アフリカの変革⁶⁴をできる限り実行可能な手段によって促進することであった。そうした調査団の一連の調査などの報告が「アパルトヘイト白書（Mission to South Africa: The Commonwealth Report）」として刊行された⁶⁵。その報告書の緒言及び本文でブラック・サッシュについて言及されている。

⁶² なお、1961年に脱退するまで、南アフリカも英連邦の一員であった。脱退の経緯については次を参照。林晃史「南アフリカ連邦の英連邦脱退」、『アジア経済』Vol.23 No.7、1982年、67-79ページ。

⁶³ 「賢人」として選出された人々はマルコム・フレーザー（元オーストラリア首相）、オルセグン・オバサンジョ（元ナイジェリア元首）、など7名であった。

⁶⁴ 1983年には首相制から大統領制への移行、人種別三院制議会の導入などボタ政権による「改革」が行われた。しかし、これらは国際非難をかわそうとする表面的な見せかけの改革だとして非難が国内外で続出した。

“一条の希望の光について、最後に触れておかなければならない。それは、豊かな人間精神が多種多様な形で、南アフリカのなかに息づいているということだ。勇敢な若者たちのなかに、教会に、UDF（統一民主戦線）として結実した連合戦線のなかに、もともと過酷な抑圧を耐えてきた女性たちのなかに、ブラック・サッシュなど女性団体の固い信念に支えられた奉仕のなかに、それは輝いている。”

“白人のなかにも、当初からアパルトヘイトに反対してきた人びとがいる。もっとも知られているのが婦人団体ブラック・サッシュであろう。もちろんその他にもたくさんの団体と個人が—本当に勇敢に—アパルトヘイトに反対して闘ってきたことは多くの記録が明らかにしている。”⁶⁶

ここでの記述からもブラック・サッシュが国際的にも認知され、「南アフリカの（白人の）良心」というような好意的な受けとめられ方をしていたことが分かる。

国際的な認知ということではそれを如実に物語る出来事として、「ノーベル賞候補者への推薦」というエピソードがある。1987年にリベラル・インターナショナル（the Liberal International）からブラック・サッシュを1987年のノーベル平和賞候補に推薦したことが伝えられた。リベラル・インターナショナルの一員である「スウェーデン人民党（Swedish Folkpartiet）」からの推薦によるものだった。⁶⁷

このようにブラック・サッシュへの国際的な認知は彼女達の活動がこの時代に外へと展開し、ネットワークを拡げていっていたことの証でもある。「南アフリカの白人の良心」という外部からの認識は、そうした活動展開とリンクしていよう。

このように国際社会が彼女達に注目し、逆に国際社会の協力を得られたのも彼女達が活動を通じて収集した情報がアパルトヘイト（体制）が具体的に人々にどのような影響を与え、国際社会としてどう批判すべきかを考える有用な道具となりえたからである。具体例を伴うだけに説得力があるこうした情報供与の役割は、彼女達への評価という意味だけでなく、そうした評価が彼女達自身の活動とアイデンティティを支えていたという意味でも大きなものだった。

おわりに

以上のことからまず指摘されるのは、外部認識が誤認識も含めてやや固定した印象であるのに対して一貫して変わらない自己認識はない点である。おおよその枠自体に大きな変化が

⁶⁵ 本稿が参照した日本語訳は、英連邦賢人調査団、笹生博夫ほか訳（1987）『アパルトヘイト白書—英連邦調査団報告』、現代企画室。

⁶⁶ 英連邦賢人調査団（1987）『アパルトヘイト白書』、現代企画室、20、67ページ。

⁶⁷ SASH, vol.30,no.1,May 1987,p.42. なお、ブラック・サッシュがスウェーデン政府にも支持を受けてきたことなどを考えると、スウェーデンの団体が推薦者であることに不自然さはないが、この時期、南アフリカが非常事態宣言のなかにあり、国際的な注目を浴びるなか候補として推薦されることは政治的な意図も窺える。

無い場合でも中身は常に時代と状況から吟味することを求められてきた。例えば、「女性」であれば50年代の設立当初の社会的に女性が「妻」、「母」という意味付けが強い時代には、ブラック・サッシュの会員の自己認識もその枠に囚われている。それが、70年代半ばのやや先走った「女性」としての連帯の失敗を経て80年代の世界的な「女性」をめぐる言説の潮流の変化なども後押しし、人種や様々な違いを超えた「ひとりの人間としての」連帯しうる「女性」というような認識の変化があった。こうした変化は活動内容が外に開かれる80年代は、外部との接触によって彼女達が自己を再認識する行為も引き出され、そのため自己を認識する要素が単に増えたというだけでなく、従来からある「白人」、「女性」という認識においてもその中身の再考、再認識が促されたと言える。

また、60年代の多人種組織化の議論における「人種」問題への意識と政府による「分離発展政策」の余波、ソニア・バンティン問題における「共産主義」への対応、70年代後半の法的変化に伴う財政基盤への影響から派生した「男性の会員化」の問題、そして常に喉仏に突き刺さる棘のように存在する経済的既得権と絡んだ「中産階級」の問題。アパルトヘイトが浸透したことによる社会の分断状況の定着化が、アフリカーナーを始めとする同じ「白人」コミュニティ内にくくられた人々との間に引き起こす疎外や分断。この様に常に自己の属性を疑い、新たな属性への気づきを求められ続けてきた。

最後にこうした齟齬、葛藤に置かれた状況の中で自己を支える認識の源泉として重要だったのは、ブラック・サッシュが弾圧期も含めて活動が困難な時代にも直接アフリカ人の支援を行うという「顔の見える関係」を様々な人のネットワークを通じて維持してきたことである。そうした「人どうしの接触」が、自己、他者の認識の形成に影響しただけでなく、アパルトヘイトの被害実態の情報を蓄積するという実務的な意味に加え、アパルトヘイトの被害者や対外的な関係において信頼関係を築く源泉になりえたといえるだろう。別の見方をするとそうした顔の見える関係、接触を築けなかったアフリカーナーを中心とする白人コミュニティの人々とは、信頼関係を築けず、認識にも歪みが生じやすかったと言えよう。

自己認識と他者からの認識とは、両者の齟齬、葛藤を含む相互作用によって影響を受け、さらにそのときの社会、時代がもつ「時代性」にも影響を受けるものである。しかし、それによって生じる認識の歪みも含んだ上で「顔の見える関係」を維持できるかどうかということが組織においては活動を維持する上で、また社会においては分断状況を乗り越えていく上で重要であることを物語ってはいないだろうか。

(かみくぼ かずよ 本学非常勤講師)